マヤ・キチェ族長老、ドン・アレハンドロが見据える地球変革の時

マヤの叡智が込められた長期暦の終わりと聖なる杖

昨年、来日したグアテマラ共和国先住民のリーダー、マヤ・キチェ族のアレハンドロさんは、マヤ族の火の儀式を日本の地で執り行い、世界平和への祈りを捧げました。2012年を来年に控え、世界的な変化の憶測が様々に飛び交う今、アレハンドロさんは、その視線の先に何を見据えているのでしょう。マヤ暦最後の日の真相と、「聖なるの杖」に秘められたエピソードについてお聞きしました。

取材・文◎町田光　取材協力・写真提供◎SOTA&SOTA JAPAN、スティーブ・コープランド　通訳◎鈴木美穂

ドン・アレハンドロ・シリロ・ペレス・オクスラ

マヤの伝統文化を正しく継承する長老の一人であり、
グアテマラ共和国内におけるマヤ族の男性・女性長老、
総勢約450名から構成される「グアテマラ先住民長老評議会」および、
北米・中米・南米に存在する先住民族で構成される
「アメリカ大陸先住民族長老評議会」の代表。
マヤ暦とその預言の保持者「デイ・キーパー（Day Keeper）」でもある長老は、
メッセンジャーとして世界中で活動しながら、
「グアテマラ政府先住民特別大使」としての任務を担っている。
「ワカテル・ウチュウ（さすらう狼）」とは、長老のマヤ語での名前。

5200年周期を持つマヤの長期暦の意味するもの

逃げ惑う宝珠を龍が飲み込むと、
そこは暗闇の世界となった。
次に龍がその宝珠を吐き出した時、
そこに新たな時代が幕を開けた――。

これは、長崎県長崎市の諏訪神社の祭礼「**長崎くんち（おくんち）**」の出し物として有名な、「**龍踊り（じゃ）**」に秘められた伝説。

昨年の11月、「龍踊り」をオープニングとする平和の祭典が京都で執り行われました。メインセレモニーは、日本の仏教教団とマヤ族が、火を使ったそれぞれの伝統儀式を行い、その融合を通して世界平和への祈りを捧げること。

それにあたって、マヤ・キチェ族の長老にしてデイ・キーパー（マヤ暦の継承者）であり、ウィズダム・キーパー（**マヤの叡智の継承者**）でもあるドン・アレハンドロ（以下、長老）をリーダーとする、**27名のマヤ族の子孫たちがグアテマラ**から招聘されました。

「龍踊り」において、龍が飲み込む宝珠とは、地球に恵みをもたらす月と太陽を象徴したもの。龍が宝珠を飲み込み、世界が闇に閉ざされる光景は、マヤの預言**にある「13バクトゥンと13アハウの時」**を象徴するかのようです。長老がこう語

03_008-011.indd 8　11/01/26 20:52

13バクトゥンと13アハウの時は、先祖の叡智へと回帰する時である。（マヤの預言より）

アレハンドロさんによる「火の儀式」。この写真は、海外で執り行われた時のもの。人々はサークル状に炎を取り囲み、祈りを捧げる。「火の儀式」は人類を目覚めさせるためのものであり、人々の心に宿る炎を活性化させるという意味がある。

ります。

「13バクトゥンと13アハウの時とは、〝マヤ長期暦の最後の時期〟を指します。この時期をもってマヤ長期暦が終わりを迎えます。

13バクトゥンと13アハウの時が終焉を迎えると、私たちは数日間の暗闇を体験することになるでしょう。それが何日続くのかはわかりません。そして次に朝日が昇った時、私たちは新たな時代を、生まれ変わった太陽と共に始めていくことになるのです」。

マヤ長期暦とは、数多くの種類を持つ**マヤ暦の中でも「5200年周期」という**桁外れに長い時間の流れを示した暦で、日常に使う暦ではありません。そのため、長期暦の存在理由については謎も多く、研究者の一人であるカール・ヨハン・コルマン博士は、預言的な暦であると次のように発表しています。「これは人類の**文明の勃興と人間の意識進化の過程を記**した神の青写真である」。

人類への神聖な教え 暦はイヤー・ゼロで切り替わる

しかし長老によれば、長期暦は象徴図形のようなものなのだとか。

「いろんな解釈ができるでしょうが、長期暦は銀河太陽系の暦であり、**5200年という周期で地球が新しい太陽を迎える**ことを示す暦なのだと、言い伝えられています」。

まだまだ多くの神秘のヴェールに包まれている「マヤ暦」。一体どんな目的で、どこからやって来た暦なのでしょう。

「太古の昔、私たちの祖先でもあるプレアデス星団から4人の若い使者がやって来ました。4人は長い間、マヤ族と暮らし子孫を残していきました。彼らは賢者であり、預言者でした。マヤ暦は彼らが残したものであり、創造主からのギフトであり、人類全体への神聖な教えであると私たちは考えています」。

しかし、長期暦が終わることが、多くの誤解に繋がりました。長期暦の最後の**日が「2012年12月21日」であり、暦が終わることを「世界終末説」と結びつけて、「2012年12月21日に世界が滅びる」とする噂が後を絶たなくなったのです。**

これに対し長老は、ここ数年間、変わらないメッセージを発信し続けています。

「13バクトゥンと13アハウの時を、私たちは〝イヤー・ゼロ〟と呼びますが、それがいつ**来るかマヤ族は断言など**できませんし、これまで**も日付を特定して公表し**たことはありません。

というのも、一般的に使われているグレゴリオ暦と、マヤ暦の日付を正しく重ねることなどは、様々な要因から不可能だからです。ただひとつ言えることは、〝その時は近づいている〟とマヤ族の私たちは感じているということ。いつその時が来てもおかしくありません。5年後、10年後であってもおかしくないのです。

これは、世界が終わるのではなく、新たな時代のスタートであり、同時に長期暦が新たなサイクルをスタートさせる時期に入るということなのです」。

古の叡智（いにしえ）が宿る伝統を保持し新たな時代に活かしていく

しかし、「数日の暗闇」という表現に、恐怖を感じる人々はいるはずです。何か**とんでもないことが起こるのではないか**と……。

「太陽はこれまでも、**5200年ごとに**変わってきたのです。人類はこれまでも、イヤー・ゼロを繰り返し体験してきました。これは自然のサイクルですから、怖

03_008-011.indd 9 11/01/26 20:52

マヤの聖なる教えを映像化して伝える
『シフト・オブ・ジ・エイジズ』プロジェクト

一本の貴重なドキュメンタリー映像が、完成へと向かっています。
それが、スティーブ・コープランドさんが立ち上げた
映像プロジェクト『SHIFT OF THE AGES（通称SOTA）』。
アレハンドロ長老の日本での儀式の様子を撮影するため
来日したスティーブさんに、お話を伺いました。

――どんな映像作品を制作中なのですか？

5年間、アレハンドロ長老に密着して、様々な教えを映像の中に取り込みました。長老の「聖なる杖」が返還された場面なども収録しました。

また、叡智を継承する先住民族の人たちや、賢者、さらには著名人や科学者にもインタビューをしています。こうしたインタビューシーンに加え、現代文明のありさまを振り返るための象徴的な画像や、映像をコラージュしています。

映像のメインテーマは「変化の時が来ている」ということを、体感してもらうことにあります。

――教えを学ぶというより、体感型の映像なのですね。

もちろんたくさんのメッセージから学ぶこともできるでしょう。しかし、あまりお説教くさくならないように、「感じてもらう」ことを意識しています。そのため、「癒し効果」に基づいた音の周波数を使ったサウンドエフェクトを加えたり、癒しを与える映像を取り入れたりしています。

スタイリッシュでクールな感じの映像を目指したのは、若い世代の人たちにこの映像を見てもらいたいからです。

――スティーブさん自身は、マヤの叡智からどんなことを学びましたか？

グレゴリオ暦で生きている多くの人は、時間に追われるばかりで「自分を見失いやすい」と思います。一方、マヤ暦で生きている人たちは、一日に過去も現在も未来も集約された「本当の今ここ」に生きている人たちだと思います。

それはすなわち、ガイアのリズムであり、自分を取り巻くすべての環境に感謝の心で生きていけるライフスタイルなのでしょう。そうした生き方を、映像を通してできるだけ多くの人に知って欲しいのです。

Information

『SHIFT OF THE AGES』プロジェクトに関する情報は、以下のWebサイトでご覧ください。

SOTA JAPAN
http://www.sotajapan.org/

うして2人の大統領が誕生したその影には、長老の家系に伝わる「聖なる杖」があったのです。

大統領就任式の日、長老はスピーチを述べる栄誉を授与されました。そのスピーチの席上、長老が発信したメッセージの一部をご紹介しましょう。

「世界中の人の行いが、変化しなければなりません。惑星地球の生命を守ることは、すべての者の責任です。先住民がすべての人々にメッセージを届けている理由がそこにあります。それは、健全な未来を新しい世代に継承することによって、人間の生命を救うためであり、この惑星を救うためなのです。そのために、私たちはすべての人々に、先住民も非先住民も、お互いに理解し合い、お互いに尊敬し合うようにメッセージを送ります」（2008年1月14日、グアテマラ新大統領就任式におけるスピーチより抜粋）。

すべてと共存共栄する人類の新しい生き方

今回の来日でも、長老は一貫したメッセージを世界に投げかけています。それは**「変化の時はすでに到来した」という**ものです。

「新しい太陽の期間に入るとともに、地球の調整が行われます。世界は変容し、人類は相互理解と社会的正義、平等が支配する共存共栄の時期を向かえるのです。**これが人類の新しい生き方にほかなりません。**

今人類の多くは、お金などの物質のためだけに生きています。自分以外の生命の生死に対し、あまりに無関心です。そして戦争や暴力、ドラッグなどにより、**自然死とはかけ離れた死に方で多くの生**命が奪われています。

こうした状態では、母なる大地や宇宙との繋がりに感謝を捧げ、あらゆる生命**と共存するという本来の生き方を選択で**きません。

新しい時代では、新しい社会秩序のもと、人間は空の雲のように国境もなく規制もなく、好きなところへ移動できる自由な時代に入ります。私たちはまさに川の流れのように、すべての人間が同じ目標を目指すようになるのです。マヤの預言は変化すべき今をこう告げています。『今、夜明けの時である。課題が達成されるために、黎明を到来せしめよ』『立ち上がれ、すべての人よ、立ち上がるのだ。ひとつ、二つのグループも取り残されるな』と。

この預言は、すべての人に関わっています。富者も貧者も、黒人も白人も、男も女も、先住民も非先住民も、私たちは皆平等です。私たちは皆尊厳を持っているのです。そして母なる地球に対する責任を持っているのです」。

長老によれば、「13バクトゥンと13アハウの時」を迎えた後の新しい時代は、もはやパスポートなしで世界中の人々が自由に交流し合える時代になるそうです。すべての人たちがお互いを理解し、愛し合える時代――。

その時を迎えるために、私たちは地球**やすべての生命への愛と感謝に根づい**た生活を、日々心がけていくべきなのでしょう。

03_008-011.indd 11 11/01/26 20:52

ワイタハ族が伝える水の時代を生きる知恵

シリウスからやって来た地球最古の先住民

ニュージーランドの先住民族・ワイタハ族の間では、「レムリアの時代にシリウスから宇宙船に乗ってやってきた私たちは、イルカを経て、人間へと進化した存在である」と語り継がれています。部族に伝わる叡智には、太古の昔から新時代を予見したものも多く部族に伝わる預言「水の時代」の到来により、ワイタハ族の長老であり、シャーマンでもあるテ・ポロハウさんは世界中の人々と叡智をシェアするために活動を開始したばかり。アセンションの時代を象徴する「水の時代」についてこれまで封印されていた情報を初公開していただきました。

取材・文◎町田光　取材協力・写真提供◎中谷淳子　通訳◎鈴木美穂　構成◎編集部

テ・ポロハウ・ルカ・テ・コラコ

1943年生まれ。幼少の頃より、祖父母から伝統を受け継ぐシャーマンとして育てられ、3歳の頃には過酷な伝統儀式を授かる。青年期にはカンタベリー大学へ通い、卒業後8年間大学で生物学・科学・伝統を教授する。ワイタハ族の伝統を伝えるシャーマン、メディスンマンであり、伝統を伝える施設で、彼らの先祖の古代芸術やメディスン（薬草）、ヒーリング等の手法や思想を復興させている。著書に『The Whisper of Waitaha』『The Song of Waitaha』があり、現在『The Secret of Waitaha』を執筆中（すべて未邦訳）。

石の時代から水の時代への幕開け

2009年8月15日、ニュージーランドの聖地「ワイママク」でワイタハ族が中心となり、1万3000年ぶりとも言われるセレモニーが行われました。

ワイタハ族のシャーマンであり、部族のリーダーでもあるテ・ポロハウ長老は、そのセレモニーの意義を静かに話し始めました。

「私たち部族に伝わる預言によれば、**2009年の8月15日**は、新たな時代の幕開けの日でした。この日をもって、それまでの『石の時代』が終わり、新たな『水の時代』が幕を開けたのです」。

ニュージーランドの先住民族というとマオリ族が有名ですが、実はマオリ族以前に先住していたのがワイタハ族。ワイタハとは「偉大なる水の時代の人々」を意味する言葉です。

一説には、ワイタハの人々が地球にやって**来た時期が1万3000年前とも言われています。**人口約2万人ほどの小さな部族ですが、**世界最古の先住民として「古の聖なる教え」**を今日まで保持しているのです。

03_012-016.indd 12 11/01/25 13:34

海岸には、幾何学模様を感じさせるウロコ状の岩が多い。ドラゴンや水と繋がりのある部族を象徴しているかのよう。

水に祈りを捧げる、テ・ポロハウ長老。

エメラルドグリーンの穏やかな海が広がり、島中に伝説に彩られた神秘的なスポットが点在する。ワイタハ族は、豊富な海の幸にも恵まれている。

テ・ポロハウ長老は、ワイタハ族のルーツについてこう語りました。

「ワイタハ族はシリウスに起源を持ち、そしてイルカ族にルーツを持っています。地球へは、ムー（レムリア）の時代にやって来ました。その後エジプト、シリアへと渡り、最終的に神々によって、水の豊富な島であるアオテアロア（ニュージーランド）へと導かれたのです。

預言によれば、〝**2009年8月15日には**シリウスのアルファ、ベータ、ガンマの三つの星が光り輝く〟とありました。ワイタハ族はこの日を境に開かれた部族となり、時代の変化を大勢とともに体験していくと、言われていたのです。

実際にこの日は、三つの星がきれいに輝き、**シリウスに起源を持つ100名ほどの人々**が世界中から『ワイママク』に集まりました。ワイママクは特別な場所で、太古の昔にシリウスから人々を乗せてやって来た宇宙船が着陸し、その着陸痕であるクレーターがある場所です。残念ながら、今は樹木が生い茂っているため、それを確認することはできませんが……」。

内側に祈りDNAの記憶にアクセスする

シリウスから携えた叡智――。これが**ワイタハ族のDNAに刻まれたエッセンス**であり、「その叡智を**DNAから蘇えらせる時が今なのだ**」と**テ・ポロハウ**長老は言います。「現在は『水の時代』です。それは、古代の平和な時代の記憶を取り戻すべき時代、という意味なのです」。

テ・ポロハウ長老によれば、シリウスにルーツを持つ人種はワイタハ族だけではないと言います。日本人、イタリア人、ドイツ人などの多くも、シリウスにルーツを持つことが、古い石版に記されたリストや言い伝えなどに残っているそうです。ちなみに、シリウスからやって来た人々の特徴のひとつが、「洞窟文化を持っていること」なのだそう。

「私たちの祈りの場であり、教えの場というのは、洞窟を利用して作っています。なぜ洞窟を利用するかというと、大地のクリスタルを活用するためです。クリスタルは**DNAに刻まれた未知なる力を加速させてくれるパワー**を持っています。

これは同時に、クリスタルという自然のパワーとひとつになることでもあります。クリスタルはテープレコーダーみたいなもので、**その中に古代の叡智をたくさん蓄積しています**。クリスタルを使って**DNAを加速させる**と、私たちの心身、魂、意識のすべてをより覚醒させることができるのです。

アセンションとは、私たちが**DNAや体内の水などに保持しているすべての記憶を覚醒**させ、それを大いに活用してこれからの時代を生きることに他ならない、と私は考えています。世界中の多くの人たちの中に、レムリアやアトランティスに生きていた時代の記憶が、遺伝子の中に脈々と受け継がれています。その古代の記憶にアクセスして、呼び覚ましていくことが、新しい時代を生きるうえで大切なのです」。

では、どんな方法で遺伝子の記憶にアクセスをしたらいいのでしょう？　**テ・ポロハウ**長老は、こんなアドバイスをしてくれました。「古代の記憶を呼び覚ます方法のひとつに、『祈り』があります。自分の内側に祈ることで、記憶を取り戻すのです。

例えば、汚染された水が人々の祈りによっ

03_012-016.indd 13 11/01/25 13:35

テ・ポロハウ長老のシャーマンへの道

1943年大嵐の中、ワイタハの部族の歴史にとって聖なる山である「Tokatoka（トカトカ）」で、テ・ポロハウ長老は産声をあげました。

ワイタハ族では、シャーマンを選ぶ際、生まれた時の様々な要素を考慮します。生年月日、干潮時か満潮時か、夜の場合は月の形、そして幼少時にどんなおもちゃで遊ぶか、といったことも重要なポイントなのです。

テ・ポロハウ長老の場合は、生まれる前にシャーマンの素質がわかり、そのために必要な通過儀礼を3歳の時に行いました。その儀式は、土の中に3日間埋められるというものでした。シャーマンになるにあたっては、意識のクリーニングが必要だったため、埋められたのです。完全に埋められるため、呼吸もほとんどできず、飲み食いもできません。当然ながら仮死状態になります。その状態になると、生まれる前の記憶、過去生の記憶、未来のことや自分のカルマなど、様々なことを自然と見せられたそうです。

長老の意識が戻ったのは祖母がオイルマッサージをして彼を蘇生してくれていた時でした。現代科学のように体・心・魂・霊などを分離して考えてしまうと、この蘇生は不可思議に思えますが、すべてをひとつのものと考えるワイタハの伝統では、驚くべきことではないと言います。

シャーマンとしての教育係は、主に祖父母が担当してくれたそうです。例えばおなかがすいた時、他の子供なら「魚を捕りに海へ行っておいで」と教えられましたが長老の場合は、ある特定の夜を指示され「魚の方からやって来るのを待つのだ」と教えられたそうです。

これは、すべての物事はサイクルがあり、必要に応じて繋がり、助け合うことを体得するためでした。

テ・ポロハウ長老の生い立ちを知ると、異種間コミュニケーションなどは当たり前という、持ち前の能力にもうなずけます。

古くから部族の集会が開かれていた聖なる集会所「マラエ」。

バリ島とも似た、ポリネシアの神々を彷彿とさせる木彫り。いかめしいものが多いが、芸術性も高く、素朴な味わいがある。

て、きれいになっていくことがあります。体の中でも、同じことが起こるのです。祈りによって体内の水分が活性化され、水の記憶や**体内のDNA**を覚醒させてくれます。これによって健康にもなるでしょう。

すべてのものは、宇宙の法則で生まれ変わることができます。古代より母なる大地から与えられたその水は、輪廻の中で水が気化されて、それが雲になり、雨となってまた大地に帰っていく。すべての水が、その循環の中で叡智を記憶していくのです」。

母なる大地、父なる天、そして人間の体に流れるすべての水が、循環の中で繋がり合い、古き教えの記憶を蓄積し合っている。その教えを活かして生きることが、アセンションへと向かう「水の時代」の生き方なのだと……。

イルカが教えてくれた部族の安住の地

「水と平和の番人にして運び手」。これが、**長い旅路を生き抜いたワイタハ族に宿命づけられた使命**なのだと、テ・**ポロハウ長老**は言います。

「水は母なる地球を潤し、人体を構成する重要な自然界の存在です。私たち人類は、水をはじめとする自然界のすべての生命、存在への敬意を持たなければいけません。そして争いのない平和な社会を、今、世界が目指すべきです」。

ワイタハ族が「水の番人」と呼ばれるゆえんは、長老の名前にもしっかりと刻まれています。テ・ポロハウ・ルカ・テ・コラコという名前の「ルカ」は、日本語の「イルカ」にも近い響きですが、まさに「イルカ」を意味するのだとか。

「私の家系はルカ族、つまりイルカ族です。シリウスから最初にやって来た時は、イルカの体を持っていました。その後、人間へと形を変えました。

意識を使ったテレパシックな方法でイルカとコミュニケーションをする際には、満月の**日を中心にその前後の6日間、計12日間を**使います。多くの人がすでにご存知のように、イルカは叡智を宿した存在であり、様々なアドバイスをくれる貴重な存在なのです。

かなり太古の時代には、主に祖先の女性がイルカとコミュニケーションを取っていました。まだ火山活動などが活発だったその時代、安住の地を見つけるのは難しかったのです。そのような時、イルカによってビジョンを与えてもらい、部族が住むべき場所などを示してもらいました。ワイタハ族は、その情**報に基づいて様々な場所を転々としてきたの**です」。

ドラゴン・ロードとマジック・ドラゴン・スクール

テ・ポロハウ長老は「ドラゴン・ケア・テイカー（カキアキ）」つまり、「龍の世話人」でもあります。

「ドラゴンというのは神の化身です。私たち人間は、誰もが『ドラゴン・ロード』（龍の道）を歩まなければいけないのです。

ドラゴン・ロードとは、人生において重要な〝魂の歩むべき道筋〟のこと。しかし、人々の人生には、ドラゴン・ロードを見失ってしまうような様々なワナが仕掛けられています。ワナは自分自身が選択し、用意するものもあれば、外的な要因によって仕掛けられる場合もあります。

03_012-016.indd 14 11/01/25 13:35

“蜂のメッセンジャー”フリオ・ロペス博士に聞く

マヤミツバチと古文書の教え

マヤミツバチを探究して古文書に出会うまで

マヤミツバチの生態を探究したい一心で、必然的にマヤの古文書の「養蜂の章」を研究し、マヤ民族として初めて、体系的なマヤ文字の解読に成功した、フリオ・ロペス博士。博士いわく、「ようやく情報を公開する時が満ちた」とのこと。しかし、そこに至るまでの歩みは、決して生やさしいものではなく、日夜のあくなき努力と、ハチへの情熱に支えられていたのです。解読までに歩んだ道のりと、古文書から見えてきたこととは？人類の行方と深い繋がりを持つ、ミツバチの物語が始まります。

お話◎フリオ・ロペスさん　取材・文・構成◎ユカワマユミ　取材協力・通訳◎鈴木美穂

フリオ・ロペス◎グアテマラ出身。養蜂の家系で育ち、幼少の頃からハチに慣れ親しむ。1998年、絵文字で書かれたマヤの古写本「マドリッド・コデックス」に出会う。昆虫学博士号の修士論文を書き終えた後、2000年までにグアテマラとメキシコの蜂について研究し、その後「マドリッド・コデックス」の養蜂の章を9年間研究し、マヤ文字の解読方法を見出した。アメリカ「UCデービス大学」で昆虫学および、多角的科学の分野における博士号を取得。現在は、グアテマラ・シティ「サン・カルロス大学」研究員であり、グアテマラ・シティにある生物文化研究センター長である。
http//www.----------

マヤのスピリチュアルガイドと祖父が見抜いた人生

私たちが一般的に知っている西洋ミツバチは、針があります。しかし、針なし**ミツバチの一種である「マヤミツバチ」**（学名はマリポナ・ビーチェイ）は、マヤ文明の社会構造を学ぶにあたって、非常に重要なハチです。

子供の頃、私はグアテマラにあるマヤ族の小さな村で育ちました。一族は代々、マヤミツバチの養蜂を営んでいました。現在では、マヤミツバチの数が減ってきて、グアテマラでも一部でしか養蜂が行われていません。

祖父は、非常に知識が豊富で賢く、周りの人たちとはかけ離れた存在でした。ある時、祖父は私の将来のアドバイスを求めて、「アフキフ」（マヤのスピリチュアル・ガイド）のもとを訪れました。

祖父は私に特別な能力を感じていたらしく、「この子に、先々どういう道を**歩ませるべきなのか」とアフキフに尋ね**ると、「お孫さんは、特にミツバチとすごく深い関係にある。その道を歩ませるように」と言われたそうです。それ以来、**私は養蜂の跡取りとして祖父と多くの時**間を過ごしました。

5、6歳の頃、自然界をより理解できるよう、アフキフから儀式を受けたこともあります。当時、アフキフは私に自**然と会話をする方法を教えてくれていま**した。川などへ私を連れて行き、隣に座って**自然界の元素のことをよく話してくれ**たものです。

マヤ族のアフキフたちは、古くから、**火・水・風・地などの自然界の元素と会**話してきました。私が出会ったアフキフは、特に、水や風と会話ができる人で、彼からは、それらの声を聞く方法を学びました。風であれば、「木の動きを通して、**自分に何を語りかけているのかを知る**」というような体験を、私は積み重ねていたのです。

アフキフはいつも私を手助けしてくれました。私の人生が、祖父とアフキフによって早々に導かれたことを、今ではすごく幸せに感じています。

_026-30.indd 26　11/01/25 22:46

国内でも有名な「藤原養蜂場」をロペス博士が視察

来日時にロペス博士が訪れた、岩手県盛岡市にある「藤原養蜂場」。ここは、国内でも有名な養蜂のメッカのひとつで、日本ミツバチの自然の巣を観察可能な「人工巣」に取り入れ替えています。季節が冬ということもあり、ミツバチたちは巣箱内で暖をとり、外では活動していませんでした。

ミツバチの巣をわが子のように扱うロペス博士。巣の状態やミツバチが元気かどうかなど、一瞬で状況を把握します。「各国のミツバチの生態を見ると、その土地のコミュニティの状態までが分ります」とロペス博士。

蜂の世界を知るほどに運命の扉が開き始める

祖父はよく、「蜂をしっかり観察するように。蜂の社会構造に注目しなさい」と言いました。

また「2時間、蜂の巣を見ているように」と言われたりもしました。その巣から蜂が何匹出て行き、何匹入ってくるのか、蜂が出てきた時間や飛び方、風の温度に至るまでずっと観察したものです。私にとって、それはとても楽しい時間でした。祖父はいつも優しく細かく教えてくれたので、私は蜂について色々理解できるようになったのです。

そのうち、私は蜂のことを学ぶために、**国に1校しかない農業技術学校に行きたい**と思うようになりました。そこは非常に競争率が高く、試験勉強を始めるにしても、蜂について詳しく書かれた本はありませんでした。

それでも、私は必死で勉強し、**15歳の**時に合格できたのです。村で初めての合格者だったため、皆とても喜び、盛大なお祝いをしてくれました。

その高校は、通常は3年目に合格する**「国家認定の養蜂家の資格試験」があ**りましたが、集中的に勉強を重ねた私は、1年生の時にその試験に受かりました。これによって、**16歳からプロの養蜂家と**して認められたのです。

高校3年目になると奨学制度でメキシコへの留学生に選ばれたため、卒業後は養蜂の技術に長けたメキシコで、1年間養蜂の仕事をしました。その後、祖国グアテマラの大学に進み、農業と昆虫の勉強をしたのです。

キチェ族の村で起きた惨劇とマヤミツバチを守る運動

マヤは全部で24部族あり、一番大きな部族はキチェ族です。

私は大学の研究の一環として、「養蜂を行っているキチェ族の村に出向き、現場で養蜂について学ぶ」ことになっていました。先住民とマヤミツバチの関係性について学べる、またとない機会です。

しかし、祖国グアテマラはかねてから続いていた内戦の真っただ中であり、その紛争に巻き込まれた先住民族たちが、次々と虐殺されている状況だったのです。

キチェ族の村に到着した私が目にしたものは、家の中で人が燃えている光景でした。目の前で村ごと焼かれ、たくさんの人々が焼き殺されました。養蜂が行われていた、蜂の巣のあったところもすべて焼かれてしまったのです。**1980年**代のことでした。

私はマヤミツバチを守るために、大学**の仲間たちとともに学生運動を起こし**ました。キチェ族の村で起こった悲劇を世に伝えたかったのです。政府や軍からターゲットにされていた私たちは、仲間**の18人のうち14**人が殺され、生き残った**私たち4**人も捕まって、一週間くらいひどい拷問を受けました。

私は、本当はもっとマヤミツバチを研究したかったのです。しかし祖国の内戦が長引き、安全な地を求めてアメリカへ移らなければなりませんでした。

あくなき探究の中で出会ったマヤの古文書

アメリカにたどり着いた後は、すぐに**蜂について情熱を費やして学べる大学を**探しました。しかし、まずは英語を覚えなくてはなりません。

私は、5年ほどかかって英語を習得し、**最終的に3**つの大学に合格しました。その中のカリフォルニア州のデービス大学に入るのは私の夢でした。昆虫学で世界一有名だからです。

_026-30.indd 27 11/01/25 22:46

ちょうど私が、マヤミツバチを研究するためにグアテマラに戻った時に、祖父が亡くなりました。死の直前に彼は言いました。「蜂の世界を忘れることなく、自分の運命を全うしなさい」と。

デービス大学に戻った私は、様々な技術を持ち込んで、マヤミツバチを研究できる環境を作りました。蜂の巣の中にハイテクのマイクロカメラを入れたり、特殊なライトを使って映像を撮りながら、**ミツバチの観察を毎日24時間続けたのです。**「1匹の蜂が、生まれてから亡くなるまでにどのような行動をするのか、その社会構造はどうなっているのか」ということを。

1998年だったと思いますが、私の誕生日に友だちが「ある本のページ」を渡してくれました。それは、「マドリッド・コデックス（マドリッド古文書）」と呼ばれる、コロンブス以前の時代に絵文字で書かれた**「マヤ文字の複製本」**のコピーでした。

「古文書の中に書いてあることが理解できれば、マヤミツバチのことがもっと深く理解できるのではないか」と思うようになった私は、古文書にしるされたマヤ文字を研究しようと決めたのです。

体系的なマヤ文字の解読にマヤ民族として初めて成功

「マドリッド古文書」の原本は、壁画に**描かれている古代のマヤ文字を書き写したもの**です。その原本のほとんどは、**かつてマヤがスペイン人に侵略された時に焼かれました。**キリスト教の神父が、**「これは悪魔の本である」と決めつけたから**です。

現在は、原本を保管している都市名をつけられた「マドリッド」「パリス」「ドリスデン」と呼ばれる3冊だけが残っています。私は、そのうちの「マドリッド古文書」から研究をスタートしました。

古代の5大言語は、インド、エジプト、中国、ソマリア、マヤであり、マヤ以外の古代語は、社会的に解読が進んでいました。しかし、マヤ語に関しては、きちんと体系的に解読できる者は、誰一人いなかったのです。そのため私は研究に没頭し、**2006年には、ようやく古文書の「養蜂の章」に書かれている全容が見えてきました。**

「養蜂の章」は、古文書の一番最後の章にあたり、全体の18％程度です。それは、**建築学や昆虫学の感覚もないと読み解けないような内容**です。

マヤ言語を、「マヤン・ライティング・システム」という方法で読み解いた私は、デービス大学から博士号を取得しました。才気あふれる優秀な人が集まるデービスでも、博士号を取れるのはほんの数人だけですから、これは非常に光栄なことでした。

そのようにして、**2000年から今に至るまでの10年間**、マヤ文字の解読に時間を費やしてきましたが、マドリッド古文書の全体のうち、まだ一部しか解読できていないのです。

マドリッド古文書「養蜂の章」にしるされた教え

蜂の1日は人類の1年に相応する

「マドリッド古文書」を読み解いて分かったこととは、事実というよりも人**類に対して示唆する「教え」に近いもの**でした。そこには、私たちが調和を持って**生きていくための様々な教えが示さ**れていたのです。

例えば、マヤの神話はマヤ族の宇宙観そのものであり、天と地の繋がりや、生命のしくみも含め、人類に関するすべてのことを包括しています。その神話の中には、神々の真ん中に「蜂の巣」が描かれている絵もあります。

そして、マヤの古文書の「養蜂の章」では、そのような壮大な宇宙観の中で、どのようなサイクルが巡っているかが書かれています。

そのひとつにあるのが、「蜂の1日は、**人類の1年に相応する**」ということ。

古文書には、「生後**12日目から16日目**の蜂は肉体的に発達する時期のため、たくさんの食べ物、特に充分なたんぱく質を与えなさい」と書かれています。これを人間にあてはめると、**12歳から16歳**までの発育期の子供たちにあたり、特に成**長に必要なたんぱく質をたくさん摂らな**

ロペス博士の「マヤの古文書」講座

●現代の科学者は、「マドリッド古文書」は、スペイン人の侵略があった1556年以前のものだ」という見解ですが、私はそれには疑問を持っています。科学者たちが使っている日付の感覚は、私が発見した古代の時間感覚とは全然違っているのです。私自身の見解として、紀元前400年くらいのものではないかと思われます。

●「マヤの古文書」は、以前は、一般の人々の目に触れるようなことはありませんでしたが、ようやく15年くらい前からネットやコピーという形で、人々の目に触れるような状況になってきました。

●アメリカ大陸で、書き文字が残っている文明は、6種類くらいあります。その中のマヤ文明だけが、32万5000文字残っています。マヤは非常に洗練されて進んだ文明でした。「インカ文明」に関しては、書き文字は全然発達しなかったし、「オルメカ文明」は12種類くらいしか文字が残っていません。今のメキシコ人と言われている「メシカ文明」の人たちも、書き文字文化はありませんでした。文明によっては、重要なことは逆に残してはいけないので、口伝にするというのも事実です。

_026-30.indd 28 11/01/25 22:46